

第9回 マイケル・ライアン、メリッサ・レノス著『Film analysis –映画分析入門』

第14章 政治的批評『地獄の黙示録』監督、1979年、アメリカ

☆大下の疑問

・ライアンの立場＝『地獄の黙示録』は保守派容認に描かれていて不満、という認識でいいか。ベトナム戦争時、米国はより高圧的な態度でベトナムを制圧し、学生運動などを徹底的に排除し、リベラル的な感情を排除すれば勝利を得られたといたいということではないだろうか。

カーツは個人主義的で英雄らしく、そういった人間を保守派は肯定し、リベラル官僚組織は抑圧しようとしていた。また、カーツは残虐な軍事行為は民族解放軍に割り当て、保守派の理念に反対したリベラル派に「敗戦」の責任を押し付けていたとある。これを殺害したウィラードは、いったいどんな存在だったのか。筆者はウィラードがどの立場でカーツを殺害したと読みたかったのだ？ 表面上はカーツの殺害命令を遂行したに過ぎないが（＝リベラル的な流れの中にいる）、実行に際して独断を用い、個人主義的に行動したため、新たなリーダーになることができた、保守的に評価に値する人物として描かれていると結論付けたいのか？ そうであるならば、筆者はウィラードを批判し、映画を批判し、当時の軍の行動を評価しているということだろうか。

・田尻論で事細かに説明されていた「空虚へと向かう旅」というメッセージは、『地獄の黙示録』の批評では一切触れられていない。私自身カーツの最後の言葉「地獄が見える」というものにすごく強烈な印象を抱いていたため、この内容がすっぱり忘れられている感じが残念だった。最後に映されるウィラードの顔から、小説同様に空虚を見た様子が映画にも見て取れた。この映画は本当に英雄が如何、リベラルが如何などという議論のみで片付けられるものではないように思える。『闇の奥』にあったカーツの奥さんの証言をごっそり取り上げなかったという点も関係しそうだ。

・田尻論で「脱構築を先取りしたテキスト」と評されていたにもかかわらず、政治的批評になってしまった途端、この批評が二項対立から一歩も動かないように感じた。左翼だ右翼だという議論、映画が右翼的だという批判に終始するとダイナミックに感じなかったし、物足りない気がする。また、最後のパラ4で『心と精神』は目線が違っていいと評価するのも、批評のくくりとして“逃げ”のような気がした。辛口すぎるだろうか…。

☆増尾の疑問

・「ウィラードは、カーツを殺すという使命を遂行することで、「弱さ」から容赦しない「強さ」へと変化を遂げる。」とあるが、ウィラードは果たして本当に強くなったのだろうか。カーツを殺害することで強くなるということは、この論文の論に則せば、ウィラードが映画

を通じてリベラル→保守に変化したと言えれば強くなったと解釈できるのだろう。でも私にはそのようになったとは映らなかった。

・『地獄の黙示録』では、ウィラードの自己同一性は崩壊したのだろうか。『闇の奥』の翻案であるから、決して確定して意図があるとは言えないが、去年やっていたので同じように探してみたい。

・牛が殺される場面、カーツが殺される場面とリンクして交互に映されていた。カーツはいけにえとして表象されたのだろうか。それとも、神への捧げものとしてだろうか。

#### ↓以下授業内容↓

##### ☆映画の再視聴をしながら確認

###### ・ウィラードの様子

カーツの資料を見て、「つまづきの始まりだ」と述べる。この時はキャリアコースを外れるカーツをよく思っていない。

↓

空挺部隊に出会ったことをきっかけに、カーツを神格化する。

↓

カーツはベトナム人を尊敬していた（理性的な判断をせず、勝利のために進む）

↓

カーツのベトナム人を尊敬する発言を聞いて、ウィラードは自分もベトナム人のようになりたいと考え、カーツ殺害を決心する。

↓

カーツはウィラードのことを「来るべくして来た」と表現。

##### ☆筆者の意見の整理

→「映画自体が保守的だった」というのがライアンの意見（リベラル視点でそれを批判している）

・やっぱりリーダーが大事ということで、ウィラードは王位に就いたとしている。

→最終的な保守派容認の映画であるとの見方がこれでできる。

・そして、2001年に拡大版が登場。ここでも、9.11を予言したといわれるアラブ批判が込められていると解釈され、保守派であるべきだという意見を世間に吹聴したと考え

た。

- ・でもそうではいけない。保守がいいわけではない、ベトナム側からの視点の映画も大事にすべきだ。

終了

☆ウィラードは王になったのか

- ・カーツは王として、自然死による跡継ぎは許されなかった。(伝説に則っているため) だからこそ暗殺者としてウィラードが来ると予想していたし、そうでなければならなかった。
- ・報道写真家の人は、自分で“闇”を理解していないと認識していた。だから自分ではできないとウィラードに託した。
- ・王の代わりになれるのはウィラードだけであった。次なる王であれば、王としてカーツの偉業を一人称で息子に語るができる。
- ・そして、カーツはウィラードに殺され、ウィラードはベトナム人たちからも次なる王として認められ、尊敬された。
- ・しかし、ウィラードは王の証である金の枝(伝説のところの。実際は斧)を下ろし、そのままボートに乗って帰る。

論文では、ウィラードがカーツを殺害し、ベトナム人たちもその交代を認めたことで、ウィラードは立派な保守派になったという論調で書かれていた。しかし、物語は決してそこで終わっているわけではない。その後ウィラードは斧を下ろし、王になることを辞退した。そのままボートに乗って、故郷へ帰ろうと試みたのである。その理由は恐らく、田尻論でも見られたような、カーツから感じた空虚さとも関連しているのではないだろうか。

ウィラードはカーツに死の直前、自分のことを息子に伝えてくれと言われている。そこに時間の指定は含まれていないため、ウィラードは王としてその場に君臨し、少ししてからカーツの息子のもとへ行ってもよかったはずだ。しかし、そうはせず、すぐにアメリカへ帰国しようと図っている。

また、ボートに乗った後、軍からの連絡装置も断っている。以上を含めると、彼は完全に保守派の意見に賛同したわけでもなく、かといってもといたリベラルな組織に戻っていたわけでもないのではないか。

#### ☆ウィラード脱構築説の検証

・ウィラードは王位を放棄したか？

→リベラルにも保守にも向かわない、虚無に向かった。(弁証法的)

→それで解決したのか？

→三項対立状態。この読み解き方だと、二項対立で解釈できない危険な存在が誕生する。

(既存の考えでは制御できない勢力の登場)

→だからこそ、ウィラードは事態をカオスに導く存在。左右どちらかに就かせるべきなのだという結末をつけることもできてしまう。

・ウィラードは究極の右翼だった。

→作られた保守路線にも走らず、自ら新たに保守的位置を作った。

二人の結論は、それでもウィラードは左右どちらにも向かわず、第三項として敵対することもせず、脱構築的に描かれているとした。彼を野蛮な人にはしたくない……。

以上